

観音様と大杉

《小 中》

小中にある観音様は、昔、大きなお堂があつて、靈驗ある観音様といわれ、祭などには遠くの村からも参詣の人が集り、にぎやかであつた。

観音様の門前を通る時は、馬に乗つては通れなかつた。乗つて通ると、必ず、ぶんまされる(落馬)ので、降りて通つたものである。

本尊様の御姿は、黄金の一寸八分で、見ると眼がつぶれるといわれた。木戸(参道)の入口には二つのイヅボ(湧水小池)があつて、片方は赤い水、片方は白い水が出ていた。この白い水には、塩が含まれていたので、塩田観音といわれるようになった。また一説には塩沢観音ともいわれる。

お堂の裏には、数人で抱えるほどの大杉が生えていた。その後、本尊様が盗まれ、大杉も雷が落ちて、三日三晩も燃えつづけ、お堂も一緒に、焼失したが、まもなく、小さなお堂が建てられた。

明治の頃、村人が大杉の根を薪(たきぎ)に束ねたところ、三棚(一棚は、巾六尺高さ三尺)もあつたといわれる。昭和

観音様

